

「いのち」を多面的・実感的にとらえる道徳教育をめざして

—思いやりのある児童生徒を育てるための「いのち」に向き合う道徳の時間の研究—

道徳研究会議

高村 恒子¹

武居 美子²

水之江 忠³

松浦 義則⁴

要 約

殺人事件が絶えない世の中である。「いのち」は大切だ、と頭ではわかっているが、人や他の生き物のいのちを傷つけてしまう。まず、子どもたちの実態や意識を知るためにアンケートを実施した。子どもたちに「いのち」のかけがえなさを実感させるためにはどのようにしたらいいのかを本研究会議では話し合った。『いのち』を多面的にとらえる学習をとおして、様々な『いのち』とのかかわりを実感することができれば、思いやりのある児童生徒を育てることができる。」という仮説を立て、子どもたちの心に響き、心を揺さぶる「生命尊重」の道徳の授業を考え実践した。

その結果、各学年とも授業をとおしていのちについて考えを深められたのではないかと考える。そのことは、子どもたちの感想からもうかがえる。実際にどの程度の変容が見られたのかを知るためにアンケートを実施した。授業を行うことで、確実に変容している様子が見て取れる。今回の研究をとおしてこのような成果が得られたが、新たな課題も見えてきた。

キーワード：いのち、多面的なとらえ、実感的なとらえ、思いやり、生命尊重

目 次

I 主題設定の理由	98	5 生命尊重の授業実践	103
II 研究の内容	99	(1) 小学校1年生	103
1 研究の仮説	99	(2) 小学校5年生	104
2 研究の方法	100	(3) 中学校2年生	106
3 多面的・実感的な「いのち」の とらえ	100	6 子どもたちの意識の変容	107
(1) 多面的な「いのち」のとらえ	100	(1) アンケートの実施	107
(2) 実感的な「いのち」のとらえ	101	(2) 学年ごとの意識	108
4 意識調査の実施	101	(3) 「思いやり」とは	109
(1) 子どもたちの実態	101	(4) わたしたちは〇〇〇(な)存在だ	110
(2) 生命の大切さに気づいたり感動した 「体験」と「感じ方や考え方」	102	III 研究のまとめ	110
(3) 意識調査から	103	(1) 研究を通して見えてきたもの	110
		(2) 今後の課題	111
		参考文献	112
		指導助言者	112

¹川崎市立桜本中学校教諭（長期研修員）

²川崎市立向丘小学校教諭（研修員）

³川崎市立京町小学校教諭（研修員）

⁴川崎市立平間中学校教諭（研修員）

I 主題設定の理由

今日、少年犯罪の増加及び凶悪化、学校での問題行動の増加（いじめや校内暴力）を背景にして、世論や教育現場では「生命の大切さ」を教える教育が必要だという認識がもたれている。そこでまず、実際にどれくらいの子どもたちが罪を犯しているのかを調べてみた。

警察庁生活安全局少年課がまとめた「少年非行等の概要(平成16年1月～12月)」によると、刑法犯少年の検挙人員はここ5,6年横ばいか少し減少してはいるが、「主な少年非行事例等」として多くの事件が起こっていることを示している。

〈凶悪・粗暴な事件〉(1)殺人 15件 (2)強盗 15件 (3)放火 6件 (4)強制わいせつ 1件 (5)傷害 10件 (6)恐喝 6件 (7)窃盗 7件 〈校内暴力事件〉対教師暴力 5件 〈その他の特異な事件〉18件 〈特異な触法事件〉8件 〈薬物事件〉6件

上記(1)の「殺人」に注目すると、

表1：主な殺人事件

無職少年による女子高校生殺人・死体遺棄事件	1月	北海道
中学生による実母殺人未遂事件	2月	岩手県
中学生らによる強盗殺人事件	7月	埼玉県
無職少年による実父殺人・放火事件	9月	和歌山県
中学生による実母殺人事件	12月	千葉県

など、痛ましい事例が載っている。これらの殺人事件は、1ヶ月に1件以上の割合で起きていることになる。減る傾向にあるとはいえ、内容が凶悪化してきているように思える。また、日ごろの子どもたちの会話の中で、「死ね」や「殺す」ということばがよく使われているのも気になる。それほど深い意味で使っているとは思えないが、生命が軽んじられているように思えてならない。また、地域の方や保護者の方からも同じような指摘がなされて久しい。

これらのような事件が起きた後で、教育委員会から各学校に通達が出されるが、全校集会、学年集会、学級指導等で教師が一方的に伝える対症療法的な指導や取組では、表面的なものになりがちであり、児童生徒の心に響くものとはなりにくい。一方「自分の生命は大切だ」というとらえはあっても、それが「他者の生命も同様に大切だ」と認識できているのかという指摘もなされていることにも着目する必要がある。柴原弘志も「日常的に『生命を大切にしたい』という思いをもち、『かけがえのない自他の生命を尊重しなくてはならない』と自覚していることとの間には大いなる隔たりがある。」¹⁾と述べている。つまり、「生命」を実感を伴って深くとらえさせ、その尊さに気づかせるにはどうすればいいのかという課題がそこにある。さらに柴原は「その隔たりを解消するためには、『自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられる』段階、そうした学習活動が必要である」とも指摘している。

中学校学習指導要領では、「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。」とうたっている。しかし、「生命の尊さ」の理解は、「生命そのものの理解」を前提とするはずである。つまり、児童生徒の「生命の尊さ」に対する認識以前に、存在としての「生命」に対する確かな認識がはぐくまれていることが必要であり、「生命」を愛しく思う心情とともに、より深く豊かな認識がはぐくまれていくことが大切であると考えられる。

¹⁾ 柴原弘志 『中等教育資料』平成16年12月号

主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	
小学校第1学年及び第2学年	生きることを喜び、生命を大切にすることを心をもつ
小学校第3学年及び第4学年	生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする
小学校第5学年及び第6学年	生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する
中学校	生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する

小寺正一は「たしかに、学校教育の中で生命について知的な理解を深める取組や、生命の重要性を強調する（生命はかけがえのないもの、と熱く語りかけることが中心になった）『押しつけ』指導はそれなりに行われているが、畏敬の念をもって生命を尊重しようとする心をはぐくむ、という視点が学校教育の重要な柱として位置づけられているか、という点にいささか疑問をもっている。」²⁾と述べている。このような指摘をされると、確かに今までの取組は児童生徒指導上の方針として、「いのちは大切だ、大切にしなければならない。」ということだけを強調し、「なぜ大切なのか」「どうして大切にしなければならないのか」を発見させ、深く感じ取らせる場が傍流となっていくのではないかという反省がある。保健体育科、性教育の中では触れられてきたが、道徳教育の中心としてとらえられてきたことは少ないと考えられる。

また、現状の「生命尊重」の授業実践では、「生命の有限性（死と直面している存在）」「生命の連続性（先祖、親より脈々と繋がっている側面）」という2面からねらいにせまる資料が圧倒的に多く、年間指導計画においても、1時間扱いとなっていることが多い。そこで、「生命」を上記の2面をも含めて多面的にとらえる「単元」として整理統合した「生命尊重」の道徳の時間を構想し、重点的に指導を重ね、児童生徒の「生命そのもの」の認識と「生命尊重」の価値に対する変容を考察することは今日的な意義があると考えられる。また、その単元開発で実践した資料および展開例を発信し、「生命尊重」を多面的に深くとらえる授業の実践に役立てることをねらいとし、次のように研究主題を設定した。

研究主題

『いのち』を多面的・実感的にとらえる道徳教育をめざして

～思いやりのある児童生徒を育てるための『いのち』に向き合う道徳の時間の研究～

Ⅱ 研究の内容

1 研究の仮説

近年、子どもの生活様式も変化し、自然に親しんだり大勢で一緒に外で遊んだりすることが少なくなってきたと言われている。一人の世界にこもったり、機械とだけ向き合う子どもが増え、自然や動植物、人間とのかかわりが希薄化してきている。そのため、命あるものとの接触が少なくなり、生命の尊さについて考える機会を失ってきていると考えられる。このことは、平成17年度川崎市小・中学校教育基本調査の集計結果からもうかがえる。学校のある日にテレビやビデオを見たり、テレビゲームをしたりしている時間は、3時間以上が小学校6年生で42.9%、中学校3年生で40.6%にものぼる。また、携帯電話やパソコンでメールをよくしていると答えたのは、中学校3年生では59.5%となっている。

また、毎日健康に過ごせる現代においては、自己の生命に対するありがたみを感じることは少ない

²⁾ 小寺正一 『中等教育資料』平成16年9月号

と思われる。さらに核家族化も進み、身近な人の死に接したり、限りある生命やかけがえのなさに心を動かされたりする経験も少なくなっていると思われる。

そこで、本研究会議では生命を多面的にとらえることによって、自分を理解し、他者も理解することによって『いのち』とのかかわりを実感し、思いやりのある児童生徒を育てることができると考え、次のような仮説を立てた。

『いのち』を多面的にとらえる学習をとおして、様々な『いのち』とのかかわりを実感することができれば、思いやりのある児童生徒を育てることができる。

2 研究の方法

- 研究主題にかかわる資料収集
- 小・中学生を対象とした「いのち」に対する意識調査の実施、分析
- 児童生徒の「生命尊重」の価値に対する変容の考察
- 検証授業の実施と授業分析

3 多面的・実感的な「いのち」のとらえ

(1) 多面的な「いのち」のとらえ

「いのち」についてのとらえを柴原弘志は、『生命』についての理解をより確かなものにするために、『生命』を理解する(とらえる)観点³⁾として、「関連性・連続性」「有限性」「精神性・可能性」「特殊性・偶然性」「共通性・平等性」「神秘性」の6つに分けている。本研究会議では、これらに「感応性」を加え、7つの観点から子どもたちに「いのち」をとらえさせたい。

「いのち」は大切なものであるということを知ってはいるが、実感として理解している子どもは少ないと思われる。そこで、様々な角度から自分と他の生命との深いかかわりを知ることを通して、より深く、「いのち」

の大切さを実感できるようにさせたいと考えた。

関連性・連続性……………他のいかなるものともかかわりをもたず、単独で成立している「生命」などというものは、どこにも存在していない。受け継がれ、受け継がれ、そして次へ次へと引き継がれていく「生命」。支え、支えられて生き、生かされている「生命」。

有限性……………生きとし生けるものには、必ず死が訪れるという真理。死は確実に訪れる

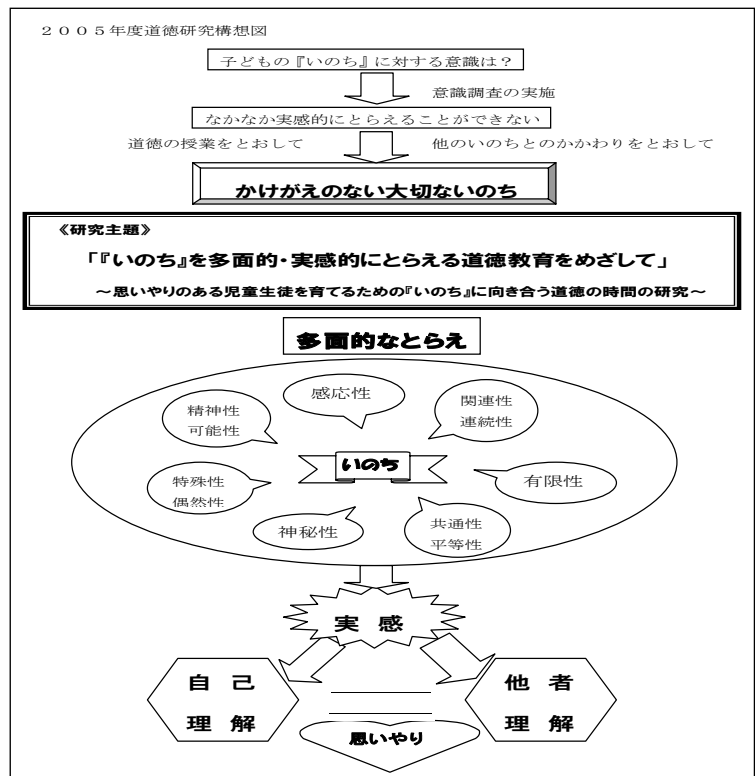


図1：研究構想図

3) 柴原弘志 『中等教育資料』平成16年10、11月号

ということとともに、再生はできず、しかもその死がいつ訪れるかも不可知であるという事実。

精神性・可能性……………一人一人の心に残る人物の生前の姿やその生き様が、少なからず自らの生き方に影響を及ぼしているという事実を確認し合う中で、そうした精神的なつながりを可能にする生き方。

特殊性・偶然性……………過去どれほど遡っても存在してはいないし、これから先も誕生することはない存在であり、銀河系の外に飛び出しても出会えるはずのない存在。

共通性・平等性……………一つ一つの生命は、唯一無二なる特殊な存在であるとする理解とともに、それらは遍く与えられた生命（その生命個々は、自らの誕生を決定できない）であって、その価値は共通的にしかも平等なものとして論じられなければならない。

神秘性……………人間の意識、その力の及ばないところでデザインされている「生命」のかたち、しくみ、はたらきの存在。

感応性……………人に生命の危険が迫ったとき、とっさに「助けたい」と思い、行動するような、直観的で言葉にできない生命どうしの感応性。

（２）実感的な「いのち」のとらえ

本研究会議では、子どもが「いのち」について考えていくことをとおして「いのち」の大切さを実感をもってとらえさせたいと考えた。7つの観点から迫ることにより「生命」への認識が深まるであろうし、新たな認識とも出会うであろう。さらに、それを道徳の授業の中において、他者や他の生命に対する認識にまで広げていくことで、自分と他との「つながり（かかわり）」を強く認識できていくのではないかと考えた。この「つながり（かかわり）に対する認識」を、本研究会議では「実感的なうけとめ」ととらえた。

「つながり（かかわり）に対する意識」とは、心から生きていると感じること、考えられることである。生きていこうとするための糧となるものを得たときに、子どもたちの心に響くと考えた。

4 意識調査の実施

「いのち」を多面的にとらえる学習を行う上で、まず現在の子どもの「いのち」に関する体験や考え方を知ることが大切であると考え、川崎市内の小・中学生を対象に意識調査を行った。3-（1）で述べた多面性を7つの観点として分けて、それぞれの設問を作成した。調査は小学校5校の低学年（829人）、小学校9校の5年生（787人）、中学校5校の2年生（623人）、合計2,139人を対象に、夏休み直前の7月第2週から第3週にかけて行った。

（１）子どもたちの実態

《設問①：何をしているときが楽しいですか》では、「友達と遊んでいるとき」「外で遊んでいるとき」が1位と2位を占めている。機械とだけ向き合う子どもが増えてきていると言われているが、この結果からは従前と同様の子どもの姿がうかがえた。また、各学年とも80%以上の子どもが、生き物（ペット）を飼った経験があり、家庭で生き物と触れ合っていることもわかった。さらに、身近な人が病気になったり、亡くなってしまった経験をもつ子どもは、いずれも70%を超えており、自分自身がいのちにかかわる事故に遭遇したり、重い病気にかかったりした経験のある子どもは、20%前後である。生き物が誕生するところを見たことのある子どもは、小学校5年生で78.4%、中学校2年生で

65.2%であったが、テレビで見たという子どもがそのうちの70%を超えている。そして、そのときにすごいと思ったり、感動したりした子どもは90%を超えている。また、自分が生まれたときの話を聞いたことがある子どもは80%前後で、そのときに前向きな感想をもった子どもが多いこともわかる。

(2) 生命の大切さに気づいたり感動した「体験」と「感じ方や考え方」

子どもの、生命の大切さに気づいたり生命の在り方に感動したりしたような実体験と、子どもの生命に対する感じ方や考え方とは関係があるのかを知るために、各設問同士のクロス集計を行った。

生き物を飼ったことがある子どもとない子どもとを比べてみると、「自殺する人の相談にのってあげたい」と答えた数は、飼ったことがある子どもの方が3～5ポイント多い。他の設問でも、生き物と接したり、身近な人やペットの死を経験したりしている子どもの方が、「自殺する人を助けてあげたい」「自殺する人がかわいそう」などという回答が「直接自分とは関係ない」「自殺するなんて弱い人だ」を上回っている。

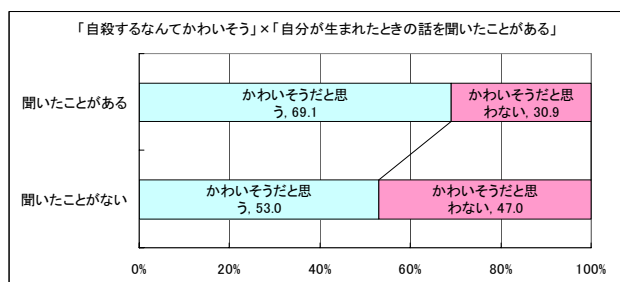


図 2 : [小学校5年生]「自殺するなんてかわいそう」×「自分が生まれたときの話を聞いたことがある」

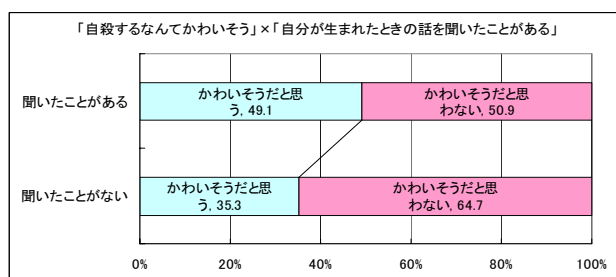


図 3 : [中学校2年生]「自殺するなんてかわいそう」×「自分が生まれたときの話を聞いたことがある」

図 2、図 3 は、《設問⑧：あなたは、自分が生まれたときの話を聞いたことがありますか》と《設問⑬：様々な理由で自殺をする人がいますが、あなたは「自殺するなんてかわいそうだ」と思いますか》とのクロス集計結果である。「自分が生まれたときの話を聞いたことがある」と回答した子どもが、「自殺する人はかわいそうだと思う」と回答した割合は、小学校5年生では69.1%、中学校2年生では49.1%であり、「自分が生まれたときの話を聞いたことがない」と回答した子どもに比べて、小学校5年生では16.1ポイント、中学校2年生では13.8ポイント上回っていることがわかる。自分が生まれたときの話を聞いた体験と自殺する人に対する感じ方や考え方との間には、何らかの関連があることが読み取れる。

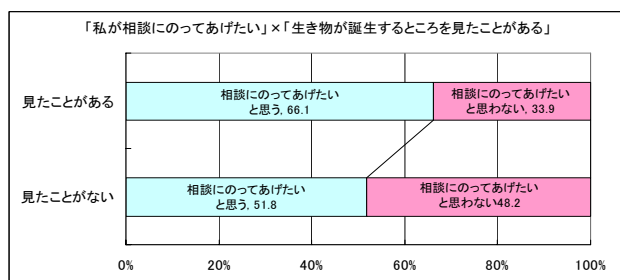


図 4 : [小学校5年生]「私が相談にのってあげたい」×「生き物が誕生するところを見たことがある」

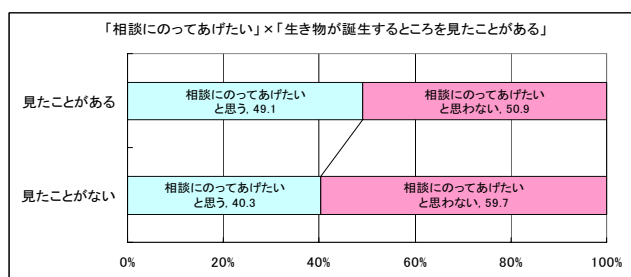


図 5 : [中学校2年生]「私が相談にのってあげたい」×「生き物が誕生するところを見たことがある」

また、図 4、図 5 は、《設問⑩：あなたは、生き物が誕生するところを見たことがありますか》と《設問⑬：様々な理由で自殺する人がいますが、あなたは「相談にのってあげたい」と思いますか》とのクロス集計結果である。「生き物が誕生するところを見たことがある」と回答した子どもでは、「自殺する人の相談にのってあげたい」と回答した割合が、小学校5年生で66.1%、中学校2年生では49.1%であり、「生き物が誕生するところを見たことがない」と回答した子どもに比べて、小学校5年生で14.3ポイント、中学校2年生で8.8ポイント上回っている。生き物が誕生するところを見たという体

験は、自殺する人に対して相談にのってあげたいという感じ方や考え方と、何らかの関連があることが読み取れる。

(3) 意識調査から

「いのち」に対する意識調査をとおして、子どもの「いのち」に対する考え方は、世間で言われているほどすさんではないということがわかった。例えば「飼っていた生き物が死んでしまったとき、悲しかった」「自分が生まれたときの話を聞いて嬉しかった」「生き物が誕生するところを見て、感動した」など、生きることや生命に対して前向きなとらえをしている子どもが多く、この子どもをどのように育てていけば、より心豊かな人間に成長していくのかという課題が生まれた。また、クロス集計を行ってみて、子どもの生命の大切さに気づいたり感動したりした体験と、生命に対する感じ方、考え方とは強く結びついているということがわかった。このことから、感動する心をより育てるためには、「生き物とたくさんかかわる」あるいは、「生命の誕生に出会う」という場面を多くもつことが大切であるとする。それらを通して生命の神秘性・可能性をとらえ、「いのち」というものが「かけがえのないもの」であることを実感できるような道徳の授業づくりを行なっていく必要がある。

5 生命尊重の授業実践

今年度、本研究会議の研修員のクラスでは、年間計画で内容項目 3—(2)「生命尊重」の道徳の時間を多く設定した。「生命」を多面的な観点からとらえてねらいに迫り、道徳の授業を進めていくと、仮説に基づいた子どもたちの変容が見られると考えたからである。一つ一つの授業が子どもたちにとって新鮮なものとなるように、資料選びに時間をかけ、ビデオやパワーポイントなどの視聴覚機器を取り入れたり、役割演技や動作化など身体表現を取り入れたりした活動など、学年の発達段階やクラスの状態に応じて工夫を凝らした。また、授業の前には研究会議において、生命の多面的な観点から資料を分析し、そのことを指導案に反映させた。

このような実践を続けた結果、回を重ねるごとに子どもたちから生命とのかかわりについて深まった意見が出てくるようになり、子どもたちの心に少しずつではあるが、多面的な生命のとらえと実感的な受け止めが浸透していることがうかがえた。今年度行った授業は次のとおりである。

(1) 小学校1年生

表3：小学校1年生の実践

主 題 名	ね ら い	資料名 (出典)	観 点
いのちを守り育てる	身近な生き物の誕生や成長の様子を見つめ、生き物のいのちを大切にしようとする心情を育てる。	ハムスターのあかちゃん (学研)	神秘性 関連性・連続性
大切ないのち	生きているもの全てに尊い生命があることを知り、それを大切にしようとする心育てる。	しぜんのいのち (学研)	神秘性 関連性・連続性
いのちを大切に	生き物が一生懸命生きている様子から、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	うみがめのあかちゃん (文溪堂)	神秘性 関連性・連続性
かけがえのないいのち	動植物すべてのものにいのちがあることに気づかせ、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	ナイチンゲール (学研)	特殊性・偶然性 共通性・平等性 有限性

生まれるってすごいな	人が生まれることのすばらしさを感じ、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	赤ちゃんがうまれたよ (文溪堂)	関連性・連続性 神秘性 特殊性・偶然性
------------	--	---------------------	---------------------------

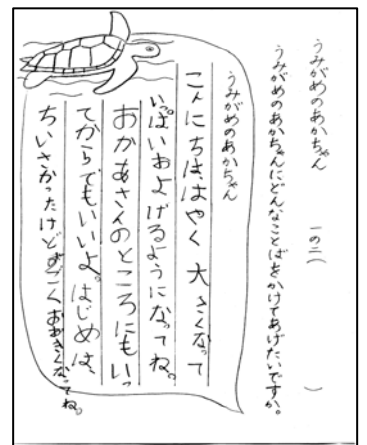
小学校1年生ということで、人の生命よりも身近な生き物のいのちから入った方が理解しやすいと考え、生き物のいのちを中心に授業を行った。ビデオやペープサート、かぶり物、動作化などを使い、授業の展開を工夫した。そのことで、小学校1年生なりにその生き物になりきって考えることができた。

検証授業として行った「うみがめのあかちゃん」は、次の3つの場面で構成されている。①うみがめのお母さんが砂浜に上がってきて卵を産む場面。②卵からかえったあかちゃんが海をめざす場面。③海に出たあかちゃんが、一匹一匹広い海で生きていく旅立ちの場面。これらの3つの場面をとおし、いのちを考えさせようとした。その際、うみがめが産卵して海に戻る様子やあかちゃんがめが誕生して海に向かう場面の映像を見せながら資料を読み進めた。

この資料では、「神秘性」「関連性・連続性」の観点で考えた。「神秘性」の観点では、誰に教わってもなく砂浜に上がってきて砂の中に卵を産み、生まれてきたあかちゃんがめも自力で海へ向かっていくという生き物の神秘から、「いのち」をとらえさせたいと考えた。また、「関連性・連続性」の観点では、2億5千万年も前から生き続けてきたかめの仲間、うみがめの産卵が子孫を残すために連綿と行われてきたことをとらえさせたいと考えた。

一人一人の児童が、うみがめの親やあかちゃんになりきってそのときの気持ちを表現し、授業の終わりには、うみがめのあかちゃんに次のようなメッセージを書いた。まるで自分で飼っている大切なうみがめのあかちゃんに話しかけるように書いている姿が印象的であった。

- ・うみがめのあかちゃん、がんばってはやくおおきくなってね。(神秘性)
- ・うみがめのあかちゃん、はやくおかあさんにあえるといいね。うみにはきけんがたくさんだよ。(神秘性)
- ・うみがめのあかちゃん、はじめまして。げんきにうまれてきてくれてありがとう。(神秘性)
- ・うみがめのあかちゃん、ぶじにおとなになってね。あとともだちをつくってね。(関連性・連続性)
- ・うみがめのあかちゃん、がんばってはやく大きくなっておかあさんのように大きくなってね。(関連性・連続性)



(2) 小学校5年生

表4：小学校5年生の実践

主 題 名	ね ら い	資料名 (出典)	観 点
死をとおして見えてくるもの	死について考えることを通して、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	お別れ会のありがとう (光村図書)	有限性 関連性・連続性
【事後指導】	ホスピスのビデオを視聴し、それぞれの考えをもつ。また、夏休みに毎日記録した「自分が朝起きたときの気持ち」と「ホスピスの患者さんが朝起きたときの気持ち」とを比較しながら考え、自分の意見をもつ。		

いのちの誕生	人間の誕生の喜びを知ることとおして、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	この手にいのちを受け て～国境なき医師団～ (文溪堂)	共通性・平等性 関連性・連続性 感応性、神秘性
精一杯生きる	生きることについて考えることとおして、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	命 (大阪書籍)	神秘性 有限性
母親の思い	人が生まれる場面の出来事に触れ、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	祐子誕生～恵子の日記 から～ (研修員自作資 料)	特殊性・偶然性 神秘性 感応性

小学校5年生では、まず「死」から「生命尊重」を扱う道德の授業に入った。4～6年生の多数の出版社の副読本の中から、クラスの実態に合った資料を選び、「お別れ会のありがとう」という資料を使って「生命尊重」の道德の授業を実践した。この資料は、筆者がホスピスでボランティアをしていたときの話である。親しくしていた患者が亡くなり、悲しみに包まれる中「お別れ会」が開かれる。そこに参加した筆者は、「ありがとう」ということばと思いが溢れていることに驚き、「死」について考えるという内容である。

この授業では、「有限性」「関連性・連続性」の観点で考えた。「有限性」の観点では、ホスピスの話を知ること、人の死というものを少しでも身近に感じることであれば、「命には限りがある」ということを、イメージだけでなく現実的なものとして感じ、考えられるようになるのではないかと考えた。「関連性・連続性」の観点では、ホスピスの患者と筆者とのかかわりや思いを考えることから、限りあるいのちではあるが人と人のかかわりや思いはつながっていくものである、ということもとらえられるようにしたいと考えた。

5年生でも、資料をより深く理解させるためにビデオを視聴させたり、役割演技を取り入れたりというような工夫をした。また、「ホスピス」という子どもの知らない場所が舞台になっているので、教師が実際にホスピスに出向いて説明を聞くとともに、ビデオを借りて事前学習を行った。「死」とおして「いのち」というものを考えたので、重々しく考え込んでしまう児童もいた。授業の終わりに児童は次のような感想を書いた。

- ・命はかんたんに捨ててはいけない。命があって私はここにいる。そして友達がいる。だから命は大切。(神秘性、共通性・平等性)
- ・悲しくたってだれかが一人一日ぜったい死んでいるんだから、その分私が生きていかなければならない。(関連性・連続性、有限性)
- ・私はとても命が大切だと思います。一人の人が死んでいくたびに、家族がとても悲しむしせっかくうまれてきたのに死ぬなんてとてもごんこくだから。(関連性・連続性)
- ・生きていくために命があるんだと思った。(共通性・平等性)
- ・お母さんが産んでくれたのに、かん単に命を落とすのはいけないことです。(関連性・連続性)
- ・いのちは1つしかなく、親からもらった大切なものだと思った。(関連性・連続性)

中学校2年生

表5：中学校2年生の実践

主 題 名	ね ら い	資料名（出典）	観 点
生命尊重	動物のいのちであっても大切にする気持ちをもつ。	小鳥のひな (きらめき2 鱗資料)	共通性・平等性
死を通して見えてくるもの	死について考えることをとおして、いのちを大切にしようとする心情を育てる。	お別れ会のありがとう (光村図書)	有限性 関連性・連続性 精神性・可能性
生命尊重	人間が動物に行っていることを受け止め、いのちの大切さを考える。	犬たちが殺処分される ～ペットブームの“影” ～（*）	共通性・平等性
生命尊重	人が生まれる場面の出来事に触れ、いのちの尊さを学ぶ	裕子誕生～恵子の日記 から～（自作資料）	特殊性・偶然性 神秘性 感応性
生きることと安楽死	生きることの大切さを考える。	ブラックジャック 二人の黒い医者 (学研)	共通性・平等性 感応性 有限性

（*：写真週刊誌 FRIDAY から）

中学校2年生では、一番初めに身近な生き物を扱った「小鳥のひな」という資料から「生命尊重」の道徳の授業に入った。次に、小学校5年生と同じ資料「お別れ会のありがとう」を使って授業を行った。それは、小学校高学年の資料でも、中学校で十分使えるものがあつたからである。また、小学校5年生と中学校2年生とでは、発達段階にどれくらい違いがあるのかを探ってみたいとも考えたからである。「お別れ会のありがとう」では、かなり真剣に「死」について考えることができ、「死」をとおして「いのち」をしっかりととらえることができたよううかがえた。

検証授業は、「裕子誕生～恵子の日記から～」という自作資料を使用した。担任自らの経験を資料化したものであつたので、より思いがこもつた授業となつた。資料には、母親が妊娠中毒症にかかつてしまい、1ヶ月ほど早く生まれた裕子の誕生について描かれている。生まれるときには母子共に危険な状態になり、生まれた後もなお危険な状態が続いた。我が子を想う親の気持ちがよく表れている話である。

この資料では、「特殊性・偶然性」「神秘性」「感応性」の観点から考えた。「特殊性・偶然性」の観点では、この母親と子どもの「いのち」は、他のどの「いのち」にも代えることができないということを考えさせたい。また、「神秘性」の観点では、この世に一人の人間が誕生するという素晴らしさを考えさせたい。そして、「感応性」の観点では、母親の呼吸が弱まると、胎児の心音も弱くなつてしまふところから、「いのち」と「いのち」はつながっているのだということをとらえさせたいと考えた。

導入では、生徒が自分の生まれたときの話を発表した。難産で生まれた生徒や兄弟を流産で亡くしている生徒も何人かおり、他人事でなく身近な出来事として生徒の中に入つていった。

研修員の奥さんがつづっていた日記をもとに、パワーポイントを使って授業を進めた。終末には奥さんからのビデオメッセージを視聴させることによって、生徒たちの想いを深めることができた。また、授業者自身が父親としての立場からその時の想いを語つた。

- ・子どもを産むことは大変なんだと思いました。大変な思いをして生まれた子どもと大変な思いをして産んだ母親との間には、すごい絆があるんだろうなあと思いました。(感応性、神秘性)
- ・親と子どもはつながっていると思う。気持ちもつながっているから、心音が弱くなったりしたのだと思った。(感応性、神秘性)
- ・私は当たり前で生まれて、当たり前で育って、それが普通のことだと思っていただけ、それは違っていろいろな人の努力があったからだなあと思った。今当たり前で生きているのは幸せだなあと思った。
(感応性、神秘性)
- ・私は赤ちゃんを産む時大変なのはお母さんだけだと思っていました。でも、今日話を聞いて、大変なのはお母さんだけじゃなくてお父さんも子どもも大変なんだと思いました。家族だから…。
(感応性、神秘性)
- ・命は何にも変えることができない大切なものです。私が今ここに生きているのは両親のおかげだし、この命を大切にこれからも生きていきたいと思いました。(特殊性・偶然性、神秘性)
- ・母と子は体だけじゃなくて心もつながっているんだなと思いました。お母さんががんばれば子どももがんばるし、すごく不思議です。改めて命を大事にしたいと思いました。(神秘性、感応性)

「梅子誕生」

～母の日記から～

1. 産婦人科の先生や助産師の先生について、どんなことを感じましたか。また、お母さんへ

梅子さんは、必死の思いで梅子さんを生んだんだなあと、思いました。でも、もしかしらば梅子さんは生まれてなかつたのかも、しれないと思いました。お母さんが、12月1日中毒症だったので、確立は低いと思います。私は、この頃まで見ると、自殺する人はもつたいと思います。自分の命を自分で殺すのは、とてもおそろしくて、私には、出来ないと思いました。生まれる確立は、100%でいいし、ないし、梅子さんが生まれたのは、奇跡に近いと思いました。

2. 今日の話合いを通して、どんなことを考えさせられましたか。

自分が学び考えたこと	
命はほんとに大事なもので、たがいました。	
おと親と子は、どこかでつながっているんだなあと、思いました。	

6 子どもたちの意識の変容

(1) アンケートの実施

「生命尊重」の道徳の授業を重点的に実践することによって、子どもたちの意識がどのように変容するのかを探るための調査を行った。

この調査では、『いのち』を多面的にとらえる学習をとおして、様々な『いのち』とのかかわりを実感することができれば、思いやりのある児童生徒を育てることができる。」という仮説に基づき、人や生き物を思いやることのできるのかを把握するために、次のような設問を設定した。

- ・ 「いのち」から思いつくことば (3つずつ)
- ・ 今の学年になって家族と「いのち」について話をしましたか。
- ・ 最近、お友だちや生き物にやさしくしたことはありますか。(小学校低学年のみ)
- ・ 最近、お友だちにやさしくされたことはありますか。(小学校低学年のみ)
- ・ 「わたしたちは〇〇〇(な)存在だ。」(小学校5年生、中学校2年生)
- ・ 「思いやり」とは、何だと思えますか。(小学校5年生、中学校2年生)
- ・ 意識を知るための11の質問 (小学校5年生、中学校2年生)

この調査の1回目を10月に行った。その後、「生命尊重」の道徳の授業を実践し、12月にもう一度同じ調査を行って意識の変容に追ってみた。また、12月には、同じ学年の他クラスにも協力を依頼し、「生命尊重」の道徳の授業を重点的に行ったクラスと、行わないクラスとの間には、意識の差が出るのかを探ってみたいと考えた。さらに、3回目を2月に実施したが、中学校2年生だけは事情により実施できず、2回目までとなってしまった。本研究会議で分析した結果は次のとおりである。

(2) 学年ごとの意識

まず小学校1年生では、実践しているクラスの方が家族と「いのち」について話をしていると答えた児童が多かった。「どんな話をしたのか」という設問には、授業で扱った「うみがめ」の話や「ナイチンゲール」の話が多かった。学校での話を家に帰ってから話しているということがわかる。その他には、自分の小さい頃の話の聞いている児童も多かった。

また、平成17年11月、12月に起きた、下校途中で小学校1年生が殺されてしまった事件の話をしている家庭も多かった。「知らない人に声をかけられてもついていってはいけない。」「お友だちと一緒に帰って来なさい。」「車に気をつけなさい」などといった内容が多かった。家族とのこのような話し合いは、児童の心に残っているようである。

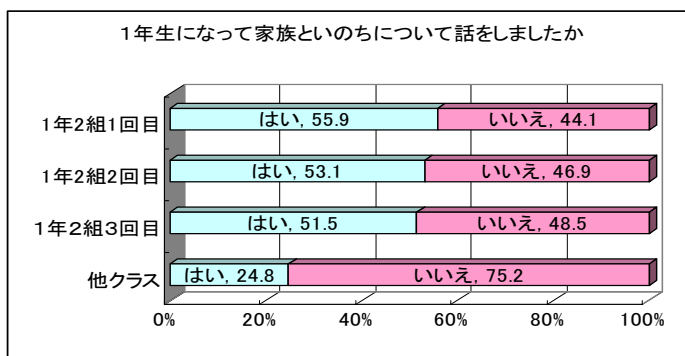


図6：1年生になって家族といのちについて話をしましたか

また、「最近、お友だちや生き物にやさしくしたことはありますか。」「最近、お友だちにやさしくされたことはありますか。」という設問に「ある」と回答した割合は、回数を重ねるごとに少しずつ増加している。特に「最近、お友だちにやさしくされたことはありますか。」という設問では、2回目と3回目の間には、16.4ポイントも差が出ている。これは、自分に対してしてくれた行為を、以前より感謝をもって認識することが多くなったからだと推察される。「その時どのように思いましたか」という回答欄には、「ありがとう」や「うれしかった」など、感謝する気持ちを書いた児童が多かった。

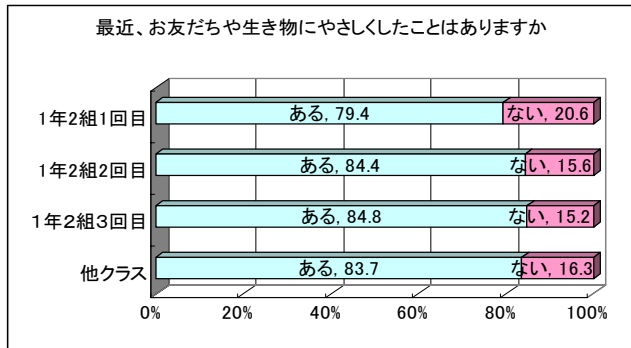


図7：最近、お友だちや生き物にやさしくしたことはありますか

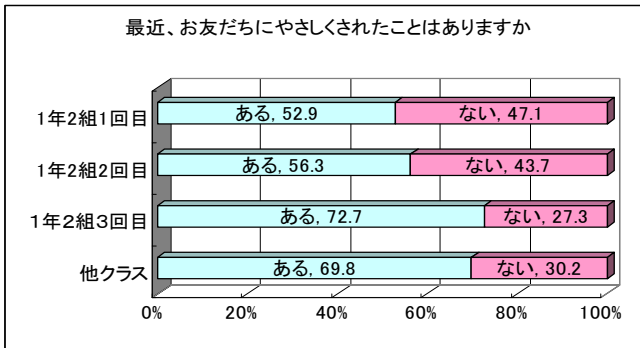


図8：最近、お友だちにやさしくされたことはありますか

次に、小学校5年生では、1回目に実施した方が「人を思いやる」結果が出た質問もあった。本研究会議では、2回目、3回目の方が、自分たちの身近な問題としてとらえ、より深く考えた結果ではないかと分析した。

その中でも、図9の「クラスメイトがいじめられていたら助けてあげたい」という設問では、クラスで似たような問題が起こった直後に行った2回目よりも2月の3回

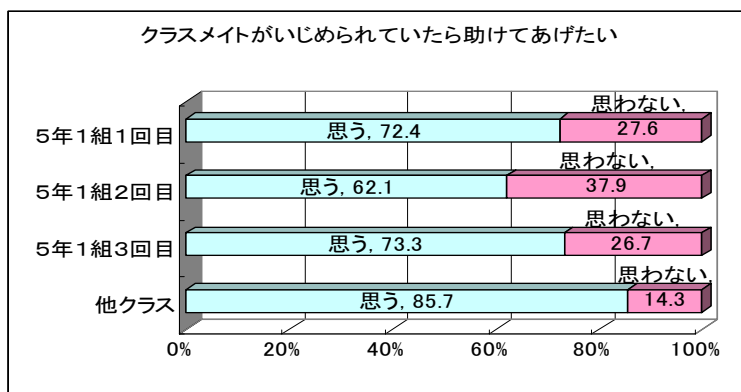


図9：クラスメイトがいじめられていたら助けてあげたい

目の方が、「思う」の割合が増えていることがわかる。クラスでじっくりと話し合い、解決に向かっていくからこそその数値ではないかと分析した。

しかし、「今の学年になって家族と『いのち』について話をしましたか」という設問には、「いいえ」と答えた児童が圧倒的に多かった。3回目には「はい」という回答の割合が少しは増えているが、やはり小学校高学年になると、家族との会話が減ってしまうのではないかと。あるいは、アンケートの質問項目に問題があったのかもしれない。つまり、会話をしているにもかかわらず、次の「どんな話をしましたか」という欄に自由に記述をするのが面倒くさいと考えたという可能性もある。また、どのような話が「いのち」の話なのかかわからないということも考えられるので、選択式にすればまた違った結果が出たのかもしれない。いずれにしても、アンケートの方法について考えなければならないという課題も生まれた。さらに、家庭にも子どもにいのちの話をさせていただくように呼びかけていく必要性を感じた。

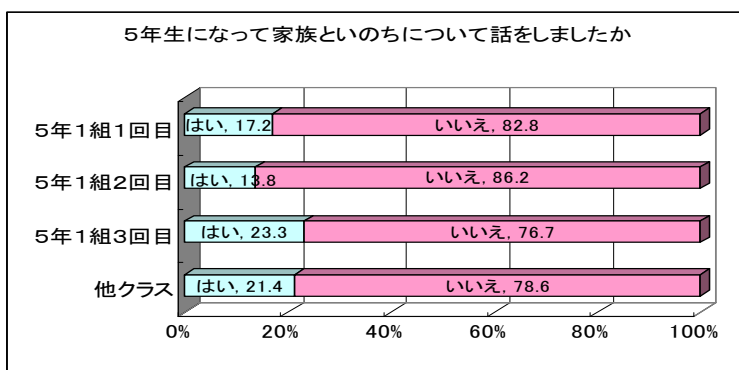


図 10：5年生になって家族といのちについて話をしましたか

さらに中学校2年生では、どの設問に対しても「生命尊重」の授業を実践したクラスとしていないクラスとの間には、回答の割合に差が生じている。特にその差が顕著に表れていたのは、「知らない子がいじめられていたら助けてあげたい」という項目であり、図 11 で示したように、実践しているクラスとしていないクラスとの間には、大きな差が見られる。「生命尊重」の道徳の授業をとおして大きく変容した部分ではないかと考えられる。

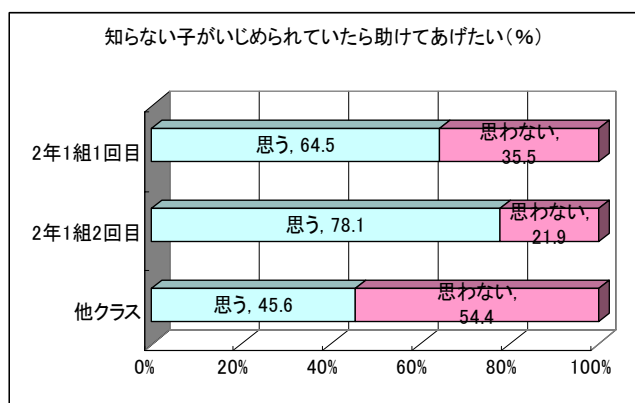


図 11：知らない子がいじめられていたら助けてあげたい

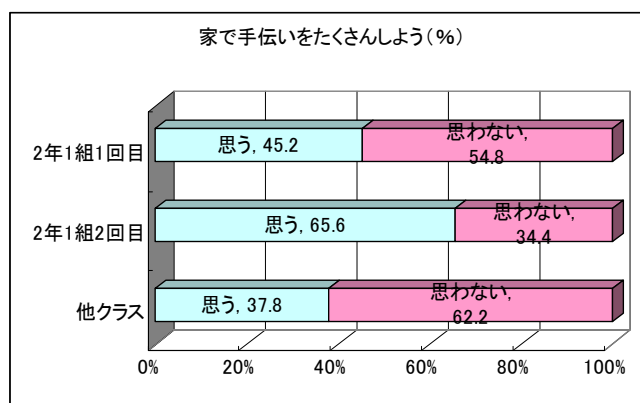


図 12：家で手伝いをたくさんしよう

また、図 12 の「家で手伝いをたくさんしよう」という項目でも大きく差が生じている。実践しているクラスでは、担任の自作資料である「裕子誕生～恵子の日記から」という資料を使って授業をしたときに、生まれてくる時の大変さや親の思いを知ることができ、親のありがたみを実感したようである。「家族愛」ともとれる内容だったので、「家族の一員として家で手伝いをしよう」という気持ちが芽生えたようである。

(3)「思いやり」とは

子どもたちが「思いやり」をどのようにとらえているのかを知るために、小学校5年生と中学校2年生に、「思いやりとは何だと思いますか。」という設問を試みた。

小学校5年生では、「人のことをわかってあげられること」

「いろいろな人を気づかう気もち」
「相手に親切にすること」
「他の人のために一生けん命になり、その人の役に立ち、よろこばれること」
「どこからともなく出てくる優しい気持ち」
「人の思いを受け入れること」
「困った時に人を助けたりする（知らない人でも）優しさ」

中学校2年生では、「他人が困っている時に助けること」

「相手の長所、短所を知って、相手のことを思いながら生きていくこと」
「人のことをちゃんと考えた発言・行動がとれる人」
「相手のことを思い、尽くすこと」
「自分のことも大切だけど、それと同じくらい相手のことを考えてあげること」
「偽善とか『ありがとう』って言われるためにするものではなく、その人を本気で助けたいと思ってすること」

などの答えが出てきた。

子どもたちは、相手のことを尊重したり、相手の気持ちになって考えたりすることが「思いやり」であることを認識していることがわかる。

（４）わたしたちは〇〇〇（な）存在だ

「生命尊重」の道德の授業を積み重ねていくことで、書き入れることばが増えたり、深まったりしていけばいいと考え、〇〇〇に「いのち」について思い浮かんだことばを書かせた。

小学校5年生では、「価値のある」 「生きるべき」
「助け合う」 「与えられたいのちを大切にする」
「みんな平等な」 「ぜったいに命を大切にする」
「一人一人大切な」 「一人しかいない」
「色々ないのちをせおって生まれた」

などのことばが出てきた。

中学校2年生では、「世界に一つだけの」 「一人一人違う」
「命を大切にするべき」 「支えあっていく」
「かけがえのない」 「みんな違ってみんないい」
「尊い」 「助け合いながら生きていく」
「一人一人大切な」 「生きるために生まれてきた」

などのことばが出てきた。生命尊重の道德の授業を重点的に実施していないクラスでは、空欄の児童生徒も多かったが、実施しているクラスではほぼ埋まっていた。また、いずれの学年でも、理由までしっかり考えて書いており、自分の生命だけに留まらず、他人の生命や個性も大切にしていることばが出てきたのは授業実践の成果であると考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

（１）研究を通して見えてきたものと担任が感じる子どもの変容

川崎市内小・中学生を対象にアンケートを行ったことで、子どもたちのいのちに対する感じ方や考え方を把握することができた。子どもたちは、素直に感動する心をもっているし、生き物を大切にし

たり、身近な人に対しても思いやる気持ちをもっていたりしている。生命の大切さに気づいたり感動したりする体験と、生命に対する感じ方や考え方との関係についても探ることができた。機械とばかり向き合うのではなく、感動的な経験をする機会を増やして、子どもたちの心をより豊かに育てていく必要があると考える。

今回、『いのち』を多面的にとらえる学習をとおして、様々な『いのち』とのかかわりを実感することができれば、思いやりのある児童生徒を育てることができる」という仮説のもと、「生命尊重」の道徳の授業を行ったが、子どもたちは資料に出てくる様々な「いのち」を実感し、自分と身近なもの、つながりのあるものとしてとらえることができた。また、7つの観点からねらいに迫ることで、「いのち」を様々な角度から見たり、深く考えたりすることができたと思われる。その結果、子どもたちに思いやりのある言動が見られるようになった。これは、「生命尊重」の授業を重点的に実践したクラスとしなかったクラスとの間に生命に対する意識に差が生じたことからわかる。

また小学校1年生では、級友が病気で入院したとき、気持ちを込めて丁寧に手紙を書く姿がみられた。休み時間に転んで擦り傷をつくってしまった子どもには、自分のハンカチを濡らせて手当てをする子どもも見られるようになった。人に何かをしてあげることに対して喜びを感じていることがうかがえる。さらに、ちょっとしたケンカが起きたときも、自分たちで解決しようと、仲裁する子どもが増えたため、大きなトラブルにならずに済んでいる。小学校5年生では、教室内で「死ぬ」「殺す」などということばが激減し、教室内の雰囲気は他のクラスとは明らかに違って、温かくなってきた。担任の言葉が児童の中に素直に入るようになってきた。中学校2年生では、人を中傷するような言動が減り、当初はクラスの間人間関係にぎすぎすしたものを感じたが、夏休み明けぐらいからは雰囲気もよくなり、落ち着いてきた。授業に集中し、やる気のある生徒が増え、行事に対しても積極的に取り組み、みんなで協力して頑張ろうとする生徒も増えた。これらは、担任がクラスを担当した当初と今現在とを比べて感じていることである。児童生徒の変容をみることは難しいことであるが、生命尊重の授業に取り組んだことで担任がこれだけの変容を感じるということは、ある程度の成果があったものと考えられる。

(2) 今後の課題

- ①生き物との出会いやかかわりを多くする体験…多くの感動体験をさせていくにはどうしていけばいいのか、考えていく必要がある。
- ②「いのち」をとらえる7つの観点…7つの観点それぞれから迫ることのできる資料を発掘、開発して、子どもたちの心に響く、心を揺さぶる道徳の授業を考えていく必要がある。また、1年間で7つの観点すべて実施することは難しい。そこで、小学校6年間、中学校3年間をとおして計画的に取り組む必要がある。
- ③道徳的実践力を身につけるために…道徳の授業を行うと、少しずつではあるが子どもたちの感じ方や考え方が変化することがわかった。「いのち」を多面的・実感的にとらえられた次の段階として、道徳的実践力を身につけていくにはどうすればいいのかを考えていかなければならない。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 小寺正一 藤永芳純 『新版 道徳教育を学ぶ人のために』 世界思想社 2002年
- 小寺正一 『現代道徳教育論』 大阪書籍 1992年
- 『中等教育資料』 ぎょうせい 平成16年9、10、11月号 2004年
- 金井 肇 『こうすれば心が育つ』 小学館 2003年
- 深澤 久 『道徳授業原論』 日本標準 2004年
- 宇井治郎 吉澤良保 『人間理解と道徳教育』 日本文教出版 2004年
- 吉田一郎 井ノ口淳三 広瀬 信 『子どもと学ぶ道徳教育』 ミネルヴァ書房 1998年
- 福田 弘 『道徳教育資料』 IPC出版 2004年
- 林 泰成 『ケアする心を育む道徳教育』 北大路書房 2000年
- 千石 保 『「モラルの復権」』 サイマル出版社 1997年
- 塚野 征 『生きる力と心の教育』 東洋館出版社 1997年
- 種村エイ子 『「死」を学ぶ子どもたち』 教育史料出版会 1998年
- 金森俊朗 『いのちの教科書』 角川書店 2003年
- 『児童心理』臨時増刊号 金子書房 2005年
- 押谷由夫 池田義雄監修 『こうすればできる道徳の学習』 1999年
- 少年非行等の概要（平成16年1月～12月） 警察庁生活安全局少年課 2005年
- 平成17年度小・中学校教育基本調査《速報版》 川崎市総合教育センター 2005年
- 七條正典 齋藤宥雄監修 『生徒の心に響く道徳授業の進め方』 東洋館出版社 2004年
- 金森俊朗 村井淳志 『性の授業死の授業』 教育史料出版会 2004年
- 塚野征 『生きる力と心の教育』 東洋館出版社 1997年
- 向山洋一監修 『「生命の授業」を創る！』 明治図書 2004年

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 京都市総合教育センター 顧問 | 小寺 正一 |
| 日本青少年研究所 所長 | 千石 保 |
| 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 | 永田 繁雄 |
| 横浜国際人権センター 会長 | 杉藤 旬亮 |
| 川崎市立小学校道徳教育研究会長（川崎市立荻宿小学校校長） | 武田 康夫 |
| 川崎市立中学校教育研究会道徳部会長（川崎市立柿生中学校校長） | 板倉 敏郎 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 高橋 太郎 |